

## 今月の逸品

NO. 76 2026. 6～2026. 7



## 「杉村尚《こころのとも》」

制作年：1979 年（昭和 54 年）

材質：ブロンズ

サイズ：W165×D230×H230

彫刻家杉村尚の 1979 年制作のブロンズ像《こころのとも》は、二人の女性胸像が背中あわせになる特徴的な構図をしている。

「心の友」であるはずの二人がなぜ背中あわせに配されているのか？ その真意はわからない。とはいえ、親友を表現するために二人の人物像をどう配置するかを考えると

き、真っ先に思いつく向かいあわせや横並びといったありきたりな構成を退け、ときに反発やすれ違いをも想起させる背中あわせの姿を選択した時点で、この像は一定の特異性を獲得している。

しかしながら二人の人物像を背中あわせに構想した途端、避けがたい造形的課題が発生する。向かいあう二人、あるいは横並びの二人と異なり、背中あわせの人物像はひとつの身振りや運動に両者を統合することが困難だからだ。まして主題が「心の友」ならこの統合はなおさら重要になる。仮に向かいあう二人、横並びの二人なら、視線を交錯させ、手を取りあわせることもできた。そのうえ、そうした造形物統合のための振り付けが、そのまま主題でもある二人の親密さ、つまりは「心の友」らしさをも表現することになりえた。けれども、背中あわせの構図を選択した時点で本作は、分裂する二人をいかにして結びつけ、ひとつの作品にまとめるかという造形的課題を抱えてしまう。

本作はこの課題をどう解決しているか？ 両者はまるで双子のように鏡映しになっており、体格も揃えられ、頭部から肩、肩から腕にかけての流れは左右対称に韻を踏んでいる。二人の腕にかかる布地は袖口の処理の違いで別々の衣服であることがわかるものの、扇形にひろがるひとつの布を一緒に纏っているかのようだ。左の女性像は耳の下方に手をかざし、そのなめらかな手の動きは後頭部から右像の頭部へと視線を導き、首、肩、腕と S 字を描くように右手に至り、右奥に回り込むなら両手の小指の結びつきをとおして右手から左手へ、腕へ、左肩をとおって他方の女性の右肩、腕、そして手のひらへと流れる運動を見ることができる。形態の韻、布地の共有、一方の身振りを見る視線がいつの間にか他方の身振りへと延長される横断的な運動。これらをとおして、背中あわせに分裂する二人は造形的に統合される。本作がたんなる「友」ではなく「心の友」でありうるのは、いままさに向かいあって手を取りあう友ではなく、背中あわせに別々の世界を見つめながらも、人知れず結びつくこの造形的統合があるからだろう。

ところでいまは見ることができないが、同じ作者による同形の像がかつて、京都駅の新幹線駅コンコースに設置されていた。サイズから見ても、本作はその作品の習作だったのだろう。そもそも駅に設置するためにつくられた像だとすれば、人通りの多いコンコースにあって、前後左右どこから見ても成立する像として背中あわせの姿が構想された可能性は高い。加えて新幹線が遠方への想像力を掻き立てるのだとすれば、仏像の印相のようでもある手元もまた違って見えてくる。手をかざす左像の身振りは再会や別れの瞬間を、小指同士を触れあわせる右像の身振りは指切りを暗示しているようにも見えてくる。物理的には遠く離ればなれになりながら（＝背中あわせ）、心理的には誰よりもすぐそばにあって結びつく（＝造形的統合）、そんな親友たちの姿を、この像は描き出そうとしているのかもしれない。それこそ今日も無数にコンコースを行き交う「心の友」の片割れたちのために。

執筆：山内朋樹（美術科教授）

※附属図書館で展示しています。